



川崎 正志 (生物有機化学)

香りに触れる

香気物質の研究を始めたのが 2006 年の 4 月で短大部の学生が私の所にまだいた頃です。ただ香りの研究などと言うと安易に真似をされそうなので、学生にも合成のターゲットが香気物質であるとははっきり伝えずこっそりと行っていました。そうこうしているうちに香りに関する事項全般に興味を持つようになりました。香水、エッセンシャルオイル (精油)、ハーブ、そしてお香です。

まず香水ですが、嗅ぐのは好きですが自分自身香りを纏ったことはほぼありません。有名ブランドの香水売り場へ行って、嬉々として試香させてもらっています。しかし、どのような香水を嗅いでも初めにエタノールを感じてしまいます。爛をした日本酒を初めて口に含んだ時いわゆるアルコール臭を感じ「こんなもの飲めない」と思った時のエタノール臭を感じます。そのあとすぐに、その香水本来の香り、厳密言えばトップノートの香りですがですが、を感じます。しかし、気の利いた言葉が出てきません。「甘い香りですね」、「花の香りですね」、「果実の香りがしますね」、そして、何のひねりもない「いい香りですね」。そうだそうだ、Guerlain の La Petite Robe Noire を初めて試香させてもらった時「ああっ、これはイチゴのかき氷のニオイがします」と言うと、店員の方がめっちゃ笑ってくれました。

ある香りに関するセミナーである私大の医学部附属病院の先生が「ラベンダーの香りを高齢者に嗅がせると足の上がり方が良くなり転びにくくなる」という臨床結果を話してくれました。そして講演の最後のスライドに原田知世さんの「時をかける少女」の映画ポスターが出てきました。「この映画の中でヒロインはラベンダーの香りを嗅いで気を失うんですよ」会場内からクスクスと笑い声が。「ラベンダーの香りで転ばれちゃ困るんですよ」場内大爆笑でした。大学に戻って喜んで学生たちに話しました。水を打ったような静けさでした。「先生何がうれしいんですか？」と彼女たちの目が訴えていました。この話をドクターコース時代の研究室の仲間との飲み会で話し、最後に「ここでは受けたけど、学生に話したら水を打ったようだった」と話したところ、学生に受けなかったことに大うけでした。

10 年ほど前からほぼ毎日朝と昼にお香を焚いています。こっそり、5 階の居室で焚いています。お香を焚き始めた比較的初めの頃ある老舗のお香屋でお香をさがしていた時のことです。あるお香に鼻を近づけました。お香そのものは甘いセッケンのような香りがしました。買って帰り焚いてみました。違った香りがしました。また、香木系のお香を焚き、しばらくしてその部屋に戻ってみると部屋がお寺になっています。お香は、そのものにおい、焚いている時の香り、焚いた後の香り (残り香) が異なります。お香は焚いてみないと本来の香りがわからないので、(店で) 焚いてもらって選んだ方がいいと手持ちのお香の書籍に書かれています。しかし、実際お店で焚いてもらって購入したことがあります。買って帰って焚くと違った香りがします。焚いたとき漂ってくる香気成分は同じはず。となると・・・、お店のおいと自分の部屋のおいの違いか？ お店だと多少は緊張して自分の部屋だとリラックスしているからか？ いずれにせよ脳に聞いてみないと分かりません。